「我論を作り偈を説きて、願はくば弥陀仏を見たてまつり、普く諸の衆生と共に、安楽国に往生せむと。」

如来の願心の表明と世親の願生心の表白と、閉目開目してこれを憶念する時、この二は完全に二重写しとなり、二つの心は二つであってしかも一つであるのを感ずる。

世親は自らの一心帰命の願生心として、如来の願心を自証し、如来の願心はここに世親の願生心として現前している。一切苦悩の群生海をこのような願生心の主体と転成しつつ、如来清浄心の廻向成就たる真実信心は、われらに発起するのである。

たまわりたる主体

たまわるということは主体が知るのですけれど、また、たまわるということを知る主体もやはりたまわったものである。そういう二重の主体の関係なんです。

ただなにかが廻向されたというのでない、自己が廻向されるのです。主体の廻向なんです。なにかのものをたまわったというのでない、たまわることを受け取る自己がたまわったのです。こういう構造です。これがつまり、たまわりたる主体性というものです。そういう意味で、ただ、ものというよりも、性というものですね、開かれるという意味があるのは。それは、目覚めるということです。目覚めずにたまわったのでない、性に目覚めるということがたまわったのです。性に目覚めるような自覚が廻向されたということです。つまり、主体性の自覚です。そういうのが、廻向心、廻心というものでないかと思います。

（安田理深著『自然と人間』より）